

2016年7月2日

マルメ研修

伊藤 直人

2007年第1回マルメ研修に参加させていただき、今回が2回目の参加となる。9年前の研修は当時の歯科医師としての駆け出しの自分にとって、見るものや知ることはすべて衝撃的で決して忘れる事の出来ない、歯科医療人生のマイルストーンとなる出来事だった。第1回の参加から約10年、自分自身がどのように成長し何を学び何を感じるのかを期待し参加をさせていただいた。

北欧の長閑な雰囲気は相変わらず心地良く感じた。歯科医療の本質を見据えた医療哲学に基づく諸先生方の講演はどれも素晴らしいものであった。そして、多くの知識が再確認であったことが自分の中では日々の歩みと成長の実感や自信として感じ取ることができた。しかし、ある種の違和感が喉仏の魚骨のように残った。

一方、肌で感じるマルメの状況は以前との劇的な違いがあった。それは医療背景の変遷だ。移民に寛容で有名なスウェーデンだが、マルメ市住民の30%が外国生まれで人口の半分以上が35歳以下という驚異的なバックグラウンドに変化をした。それに伴い補綴修復処置が急激に増え、予防大国と移民大国の両立という難題に突き当たっている世界情勢の縮図のような現場を目の当たりにした。

マルメ研修を終え、研修中に感じた喉仏の魚骨にも似た違和感を紐解いてみた。その違和感は自分自信の慢心への違和感であった。10年前にマルメ研修その歯科医療哲学を学び、今日まで日々自分自身で文献から学び知識も得てきた。振り返ってみて、走り続けた10年間で追いついた様な安心感と共に一瞬の慢心を得た。しかし、その慢心は全くの足枷であり、恥じるべきであると感じた。今がようやくスタート地点に立った状態で、これから予防歯科医療の課題を自らの手で解決し、何かを追いかけるのではなくどう自分の足で未踏の地に一步踏み出すかなのだと強く感じた。その理解により、頭の中で新たな課題と道が明確になり、またもや自分の歯科医療人生のマイルストーンとなる非常に有意義な研修となった。

最後にはなりますが、この研修を支えて下さった方々、同行させていただいた方々に謝辞を述べさせていただきます。